

都城市民会館厄払い・DOCOMOMO ウイーク

1966年（昭和41年）に誕生した都城市民会館は、現在41才であり、人間でいうと厄年に相当する。じっさい、会館は解体の危機にあるわけで、大厄に違いない。また、ことしの4月にはDOCOMOMO japanの総会にて2006年度の選定建築物10選に内定し、7月には正式発表のはこびとなった。これは、南九州初の選定であり、またとない慶事である。そこで、そのお祝いと厄落としを兼ねた『都城市民会館厄払い』と称する盛大なイベントを7月さいごの1週間に実施することになった。内容は、DOCOMOMO選記念展、DOCOMOMOプレート授与式、DOCOMOMOフォーラム及び都城市民会館見学会である。

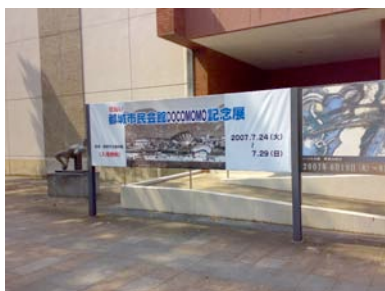
解体が取り沙汰されている都城市民会館について、あらためてその文化及び建築的価値を検証し、市民にたどしい会館の価値と情報を認識してもらうことで、近代建築の意味と意義、保存の重要性を問いかけることを目的としたものである。

「都城市民会館・DOCOMOMO選 記念展」

都城市立美術館を会場に、24日から29日までの6日間、展覧会を開催した。昨年の10月に「都城市民会館40周年記念展」を、おなじ美術館で開催したが、今回はそのときの展示品に「DOCOMOMOキューブ」という作品を加え、DOCOMOMOとその選定建築物の紹介をメインにした構成である。

「DOCOMOMOキューブ」は、これまでDOCOMOMOが選定した建築物を、一辺が20センチメートルのダンボール箱ひとつづつに名称、建設地、内外観・設計者の情報をのせ、今回の10選を含む合計125個の箱を全長約20メートルの巨大な日本地図の上に置いたものである。会場の市民ギャラリーのフロアいっぱいに広げられた地図の、東京や大阪などの大都市上には、多数の箱が積み重ねられ、とくに東京は40余の箱が林立し、まるで新宿の高層ビル街のようである。一方、東北や九州などの地方には、ポツリ、ポツリとしか箱が存在しない。大都市圏、とくに東京に近代建築遺産が集中し、いかに文化と経済が偏在しているかを如実に示している。このことは逆にいうと、地方にとって、DOCOMOMO選建築物がいかに貴重であり、重要であるかをも教えている。南九州地域にひとつだけ、ポツンと置かれた都城市民会館の箱を見て、つくづくそうおもうのであった。

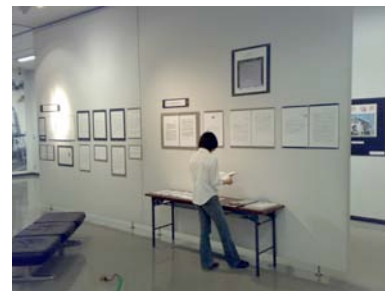
会場には「都城市民会館40年の全記録」という40年間のホールでの全ての催事を記録したパネルや、市民会館の設計図、工事中や現在の写真、会館をテーマにした市民の美術作品、未来への提案など多数の展示品が並べられたが、今回の展覧会に合わせて、会館の設計者である菊竹清訓氏から送られた会館の屋根を膜構造に置き換えた案のスケッチが、花を添えてくれることとなった。



都城市立美術館



展覧会場





菊竹氏のスケッチ



「DOCOMOMO キューブ」



「DOCOMOMO 選定プレート授与式」

展覧会に合わせて、DOCOMOMO japan の幹事長・兼松紘一郎氏が都城を訪れ、選定プレートの授与式を市役所にて行うことになった。これは、約 20 センチメートル角のステンレス製のプレートに、docomomo、選定建築物、2006 などの文字が刻まれた瀟洒なもので、選定の栄誉と価値を格調高く主張している。

7 月 28 日午後 4 時、兼松幹事長と福岡の建築家・田島氏がプレゼンターとして都城市役所を訪れ、地元から DOCOMOMO 会員のヒラカワとフレンズの白水さんが案内役として同行した。都城市側では、前田副市長と市民会館の担当課である生活文化課の職員ふたりが対応した。

兼松氏はすぐれた近代建築を検証し擁護する DOCOMOMO の思想や活動、保存することの意味や重要性などを副市長に訴え、副市長も真剣に耳をかたむけ予定の時間を超過して約 20 分間の会談であった。数人の新聞記者が取材に同行しており、終了後、記者室で取材を受け、後日、合計 4 つの新聞にこの記事が載った。



DOCOMOMO プレート



前田都城副市長に説明する兼松幹事長

「都城市民会館見学会」

ことしの 1 月から閉館中の都城市民会館は、一般の立入りが禁止されている。今回、シンポジウムの開催に合わせ、学術的な目的ということで都城市から内部見学の許可がおり、久しぶりに見学の機会を得た。

会館は天井にアスベストが吹き付けられている。数年前にその封じ込め処置はされていて、これまで、定期的にその空気中の濃度を測定しながら会館として使用されてきた。しかし、閉館後はその測定をしていないということで、見学には防塵マスクとヘルメットの着用が条件に付された。

シンポジウムに先立ち、午前 11 時からの見学会には、内外からの専門家など約 30 人ほどが参加。ホール内は電源が落としてあるため、発電機を利用したの仮設の照明に頼っているため薄暗いが、なんとか写真が撮れるほどの明るさはあったようだ。

久しぶりに見る会館だったが、その大らかな空間と、舞台と客席が一体になった、質素だが親しみやすい雰囲気、あらためてこの会館のよさを再確認した。



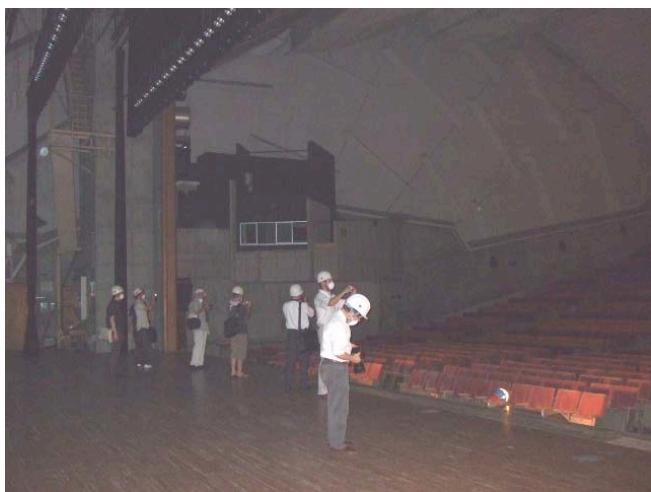
外観



入り口でマスクとヘルメットを着用



ロビー



ホール内部（舞台）

「DOCOMOMO フォーラム都城」

見学会のあと、昼食をはさんで 7 月 28 日の午後から「都城市民会館と近代建築遺産」というテーマでフォーラムを開催。第一部では、講師の兼松氏が「風景のある建築」というタイトルで基調講話。

はじめに、DOCOMOMO について、トルコでの世界大会での映像などをまじえて紹介と説明をし、つぎに、兼松氏のながい建築家人生の端緒の時期に遭遇した菊竹の作品集に載った都城市民会館の写真を見たときの衝撃を述べた。その後、兼松氏や DOCOMOMO japan が保存に取り組んでいる各地の建築物について解説。残念ながら解体に向かっている事例や、改修して保存となった事例など近代建築物の保存にまつわる状況を、豊富な映像データとともに紹介してくれた。

つぎのパネルディスカッションは、兼松氏がひきつづきコーディネーターをつとめ、パネリストには福岡の建築家・田島正陽氏と、特別ゲストとして参加してくれた建築ジャーナリストの磯達雄氏、建築史家の五十嵐太郎氏（東北大学准教授）と倉方俊輔氏（東京理科大学講師）、現代美術家の彦坂尚嘉氏の 5 人が席についた。

パネリストの紹介のあと、ひとりづつ約 10 分程度でコメントをいうことだったが、それぞれ論客ぞろいのため、みな、かなり時間を超過して熱弁。

田島氏は群馬県生まれであり、少年時代に体験したレーモンドの群馬音楽センターのことを紹介し、福岡や長崎で保存や修復に自らが関わったの事例などをまじえ、近代建築遺産の保護について語ってくれた。

都城市民会館を数度訪問し、『昭和モダン建築巡礼』という著作などで、都城市民会館にただならぬ思いを寄せている磯氏は、持参した映像データをスクリーンに写しながら、市民会館のそのユニークな形状を、キメラ、ガメラなどの怪獣性で紹介する。また、イギリスのアーキグラムの都城市民会館に類似した作品（実作ではない）や、いまが旬の東国原宮崎県知事などを引き合いに出して、市民会館の価値と可能性をユーモアをまじえて語ってくれた。

建築史家の五十嵐さんは、都城市民会館を、日本の近代建築が世界に追いつき、追い越した瞬間の記念的建築作品であると位置付け、残すべき貴重な文化財であることと、映画『三丁目の夕日』をみてノスタルジーに浸っている場合ではない、と貴重な近代建築物が壊されつつある現実を指摘。

おなじく建築史家の倉方さんからは、都城市民会館の特徴を「乱暴」という言葉で解説。それは、この会館ができた 41 年前という時代のもつ「乱暴性」であり、ものごとをゼロから考えていこうという近代建築のもつ前衛・革新性であり、もう二度とこのような建築はつくられないだろうという知見を述べた。

現代美術家の彦坂さんは、ダ・ヴィンチとラファエロの関係を引き合いに出して、超一流と一流について論じ、超一流のものが評価されるには時間がかかること、大衆にはなかなか好まれないものだが、都城市民会館の芸術的価値は超一流であるとし、人類史にのこる、かけがえのない資産であるとして、保存の重要性を熱く語った。

また、地元で会館の保存運動をしているヒラカワ（筆者）はコメントを求められ、行政と業者の馴れ合いの構造のなかで、建築物の価値や耐久性とは別のところで、解体が選択されている現実を、これまでの運動をとおして感じていると述べた。

つぎに、会場との意見交換に入り会場から数人の意見を聞いた。地元の保存運動に関わる人から、どういった活動が効果的かという質問や、福岡から参加した建築家は、地方の行政の危機的な財政

状況下ではなすべがない。国が DOCOMOMO 選定建築物に補助金を出すなどの立法的な措置が必要ではないか、あるいは、数年そのままにして放置しておくのがいいのではないか、という意見などが出された。

さいごに、宮崎の建築家から、解体の噂が出てからやってきて、壊される前に見ておこうとやってくるのではなく、もっと早く見学に来て、こうならないようアピールしておく必要があるのではないか、という指摘があり、この意見にパネリストたちが沸騰し、時間を超過して活発な意見がかわされることになった。

こうして予定の時間を 1 時間ほど超過し、フォーラムは終了した。さいごに主催者から、すぐ目の前に見える市民会館の勇姿を、来年もまた見ることができるよう保存運動を継続することを誓い、シンポジウムでの有用な意見やパネリストからの、保存するべきだというコメントに勇気づけられたことに謝辞を述べ、会場から講師とパネリストへの盛大な感謝の拍手でフォーラムは終了した。



兼松幹事長の基調講話



聴衆



パネルディスカッション



磯さんのレクチャー